

おうじ 王子のよみがえりの水

むかし、周防の国（山口県）に、二王三郎という人がおりんさったげな。とても心のきれいな人での、乱れた世の中がいやになり、旅にでることしたんじゃ。あっちこち旅をしよって、やっと安芸の国（広島県）は石井谷村に住むことにしたんだげな。

二王清祐という人に習った、刀鍛冶をして暮らすことにしたんじゃ。一生懸命に刀を打ったが何本打っても自分が気に入った刀は出来なんだけな。打ってはめぎ、打ってはめいでいるうちに体も心もくたびれてしもうた。

色々考えているとき、思い出したのが、日枝の山の八王子の神さんだった。八王子の神様を信じていなさった二王三郎さんは、すぐにお参りをして一生懸命におがみんさった。すると「刀を打つのは、ええ材料を使うても、魂を入れて打っても、水が悪うちゃあええ刀は打てん」と神様のおつげがあったそうな。

このおつげを聞いた二王三郎さんは、すぐに本地村に家を移して八王子の霊水をもろうて、一生懸命に刀を打ったそうな。

そのうちに、そりゃあ立派な刀が出来た。すぐにその刀を八王子神社に御神体としてお供えをしんさって、お祭りをしなさったげな。

それから何日かたつたある日のこと、一羽のカラスがこの霊水につかっていた、体の毛はぬけて傷だらけのカラスは首だけ出してジーンと目をつぶって、何か祈るようにしばらくつかったげな。

次の日もまた、次の日もカラスは水につかりに来たんだと。そのうちに黒い毛がどんどんはえてきて、元のようになり元気がなくなったそうな。カラスはうれしげに八王子神社の上を鳴きながら三回大けにまわって、東の方へとんで行った。

この話を聞いた人たちは、高田郡からも、可部の方からも、傷をなおそうと思うて、来るようになったそうな。

広能部落の人はこの霊水で温泉をわかしたので、風呂に入りに来る人がだんだんふえて広能はにぎやかになったげな。

今頃じゃ、この霊水を「よみがえりの水」言うて、あせもなどによくきくと行って、水を汲みにくる人もおりんさるそうな・・・。

